大阪市立大学＊西洋史研究室

□□□□□□□□□□ □□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□

西洋史研究室へようこそ

研究室の過去、現在、そして未来へ

西洋史学専修では、西欧・東欧・地中海地域からアメリカ合衆国にわたる諸社会の特質を、歴史的分析の手法を用いて学ぶとともに、自ら研究する能力を身につけることをめざします。西欧近代諸語の講読を通じて研究文献や史料の読解能力を養うとともに、古代・中世史の場合はギリシア語・ラテン語史料の読解力の養成に努めます。本専修では教員の専攻･図書ともに、ビザンツ史、イタリア史など、他大学ではあまり類のない分野が充実しているのが大きな特徴といえます。しかしもちろん、これ以外の伝統的な西洋史諸分野での研究･教育にも力を入れています。

西洋史学専修は、文学研究科の改革により2001年度より新たに設けられました。文学研究科の中では歴史の浅い専修に属します。そのため当初は他専修に比してややこじんまりしていましたが、近年は院生も増え内部は活気にあふれていま

す。2019年4月現在、西洋史研究室には指導教員が3名、前期・後期博士課程の大学院生およびODが総勢10名近くいます。指導教員のうち、北村昌史教授はドイツ近現代史を、草生久嗣教授はビザンツ史を、向井伸哉講師はフランス中世史を専攻しています。これまで院生の研究領域としては、教員と同じく中世史、ドイツ近代史、ビザンツ史を研究している者から、カタルーニャ中世史、アフリカ現代史、バルカン現代史、ドイツ現代史、ポスト･ビザンティン美術史まで多彩です。西洋史研究室は、おそらく文学研究科の中でももっとも多くの言葉が飛び交い、世界各地の多様な文化が出会う場といえるでしょう。

前期博士課程修了後は、多くの人が本研究科の後期博士課程に進学します。後期博士課程進学後は、海外の大学へ留学する人が少なくありません。これまでロシア、オーストリア、イタリア、イギリス、ドイツなどに留学しています。

前期博士課程のカリキュラムは大きく時代順に構成されています。講義は古代史、中世史、近・現代史について広く学べるよう組んであります。演習では西欧諸国語による研究書講読や、ギリシア語・ラテン語の史料講読を通じて、テクストを正確に読解する力をつけます。さらに研究指導を通じて修士論文の作成をしっかり指導します。さらに教員と大学院生によるラテン語・ギリシア語の読書会が行われたり、修士論文の作成前には前期博士課程2年の院生だけでの自主ゼミなども行われています。後期博士課程では、教員の個人指導の下に論文執筆や学会発表を行い、課程博士論文を完成することをめざします。後期博士課程の院生は、すでに多くの学会で発表し、学術雑誌に論文を掲載しています。西洋史学専修はこれまでに2名の課程博士と5名の論文博士を送り出しています。

各教員の研究分野に応じて中世史、ドイツ史、ビザンツ史関係の学会と深い関わりがありますが、専修としてまとまって取り組んでいる学会活動は今のところありません。しかし将来、独自の学会や雑誌を立ち上げるのが西洋史学専修の夢です。

西洋史研究室
北村　昌史

大阪市立大学＊西洋史研究室

□□□□□□□□□□ □□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□

教員

北村 昌史 教授

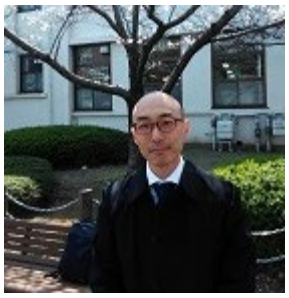
近現代ヨーロッパ、とくにドイツの社会史

草生 久嗣 教授

ビザンツ帝国史

向井 伸哉 講師

13-14世紀フランス、村落史、国制史



Proudly powered by WordPress

大阪市立大学＊西洋史研究室

□□□□□□□□□□ □□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□

北村 昌史 教授

(きたむら まさふみ)

ドイツ近代史

kitammas-geschichte7@osaka-cu.ac.jp

研究テーマ

- 近現代ドイツ社会史、ベルリン都市史、ブルーノ・タウト研究

研究テーマについて

以前は19世紀のベルリンの都市社会史を研究していましたが、現在は、ナチス政権成立とともに日本に亡命してきたブルーノ・タウトがベルリンで設計したジードルング（住宅地）を題材に、ヴァイマル期ドイツの社会史に取組んでいます。

略歴

学歴

- 1981年3月 山形県立鶴岡南高等学校卒業
- 1986年3月 京都大学文学部史学科(西洋史学専攻)卒業
- 1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程(西洋史学専攻)修了
- 1992年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻)退学
- 1995年3月 博士(文学)(京都大学)

職歴

- 1992年4月 京都大学文学部助手(-1994年3月)
- 1994年4月 新潟大学教育学部助手(-1995年3月)
- 1995年4月 新潟大学教育人間科学部助教授(-2008年9月)
- 2008年10月 大阪市立大学大学院文学研究科准教授(-2011年3月)
- 2011年4月- 大阪市立大学大学院文学研究科教授

主要業績

著書

- 南直人、谷口健治、北村昌史、進藤修一編『はじめて学ぶドイツの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020年11月30日（第I部「ドイツの歴史をたどる」第4章「反動の時代から第二帝政期へ――19世紀中頃～20世紀初頭」68−88頁および第２部「テーマから探るドイツの歴史と文化」第9章「住からみたドイツ史――木組みの家・賃貸兵舎・モダニズム建築」171−195頁担当）。
- 上垣豊・小山哲・杉本淑彦・山田史郎編『大学で学ぶ西洋史 2 近現代』ミネルヴァ書房、2011年4月20日 (第II部「『国民国家』をめざして」第5章「ブルジョワ社会の成立と国民統合の進展」第３節「ドイツの統一と第二帝国」145−153頁を担当)。
- 『ドイツ住宅改革運動――19世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、2007年5月25日、viii＋524頁。

論文

- 「ブルーノ・タウトのジードルングと大阪市立大学のモダニズム建築群」（特集：建築から歴史を語る――ドイツ現代史学会第41回シンポジウム）『ゲシヒテ』（ドイツ現代史研究会）12号、2019年4月30日、52-62頁。
- 「建築から歴史を語る――趣旨説明」（特集：建築から歴史を語る――ドイツ現代史学会第41回シンポジウム）『ゲシヒテ』（ドイツ現代史研究会）12号、2019年4月30日、45-51頁。
- 「三月革命後ベルリンにおける住宅改革と市民社会――ベルリン公益的建築協会と労働諸階級福祉中央協会」『西洋史学』（日本西洋史学会）267号、2019年6月30日、16-35頁。
- 「トルコ共和国におけるブルーノ・タウト」『フェネストラ 京大西洋史学報』（京都大学大学院文学研究科西洋史研究室）第2号、2018年９月30日、６-11頁。
- 「嫌われた住宅地の社会史――ブルーノ・タウト設計『森のジードルング』」大場茂明・大黒俊二・草生久嗣編『文化接触のコンテクストとコンフリクト――EU諸地域における環境・生活圏・都市』清文堂、2018年8月31日、169-199頁。
- Forest Settlement by Bruno Taut in Past and Present, in: *UrbanScope*, 9, June 2018, pp. 44-54.
- 「日本の大学キャンパスからみた世界の歴史――関西学院大学西宮上ケ原キャン

パスと大阪市立大学杉本キャンパス」『関学西洋史論集』（関西学院大学西洋史研究会）41，2018年3月31日、29-57頁。

- 「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」『史林』（史学研究会）100-3、2017年5月1日、67-94頁。
- 「ベルリン公益的建築協会の協会員リスト（1849年）——19世紀中葉ベルリンにおける市民の人的関係の解明に向けて」『人文研究』（大阪市立大学大学院文学研究科）、第68巻、2017年3月28日、95-113頁。
- 「ブルーノ・タウトの集合住宅」尾関幸編『ベルリン——砂上のメトロポール』竹林舎、2015年6月1日、407-428頁。
- 「ブルーノ・タウトのジードルングの社会史——『森のジードルング』を手掛かりとして」、中野隆生編『20世紀の都市と住宅——ヨーロッパと日本』山川出版社、2015年5月15日、221-264頁。
- 「近現代ヨーロッパにおける都市と住宅をめぐって」『西洋史学』(日本西洋史学会)253号、2014年6月30日、50-62頁。
- 「互酬性から見た近代ドイツ社会——結社と社会国家」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会)第9号、2012年2月29日、54-63頁。
- 「ブルーノ・タウトとベルリンの住環境——1920年代後半のジードルンク建設を中心に」『史林』(史学研究会)92巻1号、2009年1月31日、70-96頁。
- 北村昌史・明石卓「中学校における「世界史的な広い視野から」の歴史教育に向けて」『新潟大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育学部)、1巻1号、2008年10月、33-51頁。
- 「ファミリエンホイザーとベルリン市民社会——1843年の探訪記を中心に」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)8巻2号、2006年2月28日、1-12頁。
- 「19世紀ドイツの住宅改革運動——一つの概観」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)8巻1号、2005年9月30日、1-12頁。
- 「19世紀前半ベルリンにおける市民層と市の名誉職」『奈良史学』(奈良大学史学会)第22号、2004年12月20日、37-60頁。
- 「19世紀前半ベルリンの労働者をめぐる試論」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)5巻2号、2003年2月28日、7-19頁。
- 「近代ドイツの市民層——住宅問題と『資格社会』をとおして」『人間社会論集III 公共空間の再生』(名古屋工業大学人間社会科学講座)2002年10月30日、33-48頁。
- 「19世紀前半ベルリンにおける初等教育の実際——ファミリエンホイザーの学校の

事例」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)5巻1号、2002年9月30日、9-23頁。

- 「19世紀ドイツ住宅改革運動研究の動向」『西洋史学』(日本西洋史学会)204号、2002年3月30日、39-53頁。
- 「『トロイアの木馬』と市民社会――1820～31年ベルリン行政と住宅問題」『史林』(史学研究会)84巻1号、2001年1月1日、32-65頁。
- 「市民層・住宅問題・資格社会――19世紀ドイツの市民社会」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)3巻1号、2000年10月20日、210-222頁。
- 「ハインリヒ・グルンホルツァー『フォークトラントにおける若きスイス人の経験』(1843年) ――19世紀中葉ベルリンの労働者住宅探訪記・解題」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)2巻1号、1999年9月30日、123-132頁。
- 「19世紀中葉ベルリンの住宅事情」『新潟大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育学部)37巻11号、1995年10月31日、189-206頁および37巻2号、1996年3月29日、419-438頁。
- 「19世紀ドイツの市民層と住宅問題」博士論文(京都大学)、1995年3月23日学位授与、総頁304頁。
- 「1840年代ベルリンの都市社会とファミリエンホイザー」『西洋史学』(日本西洋史学会)175号、1994年12月25日、19-37頁。
- 「19世紀ドイツにおける住宅改革構想の変遷――労働諸階級福祉中央協会の機関誌を題材に」『史林』(史学研究会)76巻6号、1993年11月1日、108-143頁。
- 「19世紀中葉ドイツの住宅改革運動」『西洋史学』(日本西洋史学会)166号、1992年9月28日、34-52頁。
- 「ドイツ三月革命前後の労働諸階級福祉中央協会」『史林』（史学研究会）73巻3号、1990年5月1日、37-73頁。
- 「三月革命期前後の労働諸階級福祉中央協会」修士論文（京都大学）、1989年3月23日学位授与。

学会発表（国内）

- 「趣旨説明」シンポジウム「建築から歴史を語る」第41回ドイツ現代史学会（大阪市立大学）、2018年９月23日。
- 「ブルーノ・タウトのジードルングと大阪市立大学のモダニズム建築群」シンポ

ジウム「建築から歴史を語る」第41回ドイツ現代史学会（大阪市立大学）、2018年９月23日。

- 「日本の大学キャンパスからみた世界の歴史――関西学院大学西宮上ケ原キャンパスと大阪市立大学杉本キャンパス」関学西洋史研究会第20回年次大会（関西学院大学）、2017年11月19日(招待講演)。
- 「ヴァイマル期ベルリンのジードルング住民の社会史――ブルーノ・タウト設計「森のジードルング」のフィシュタールの祭り(1929-32年)をてがかりに――」西洋史読書会大会第83回大会（京都大学）、2015年11月3日。
- 「ブルーノ・タウトのジードルングの社会史――「森のジードルング」を手掛かりとして」中京大学経済学部附属経済研究所・2012年度特別セミナー「1920~1930年代のヨーロッパにおける都市と住宅―現代居住の源流を探る」（中京大学 名古屋キャンパス）、2012年12月1日。
- 「ブルーノ・タウトとベルリンの住環境」、史学研究会例会 テーマ「環境」第２部「環境を変える――住環境と自然環境をめぐる施策と思考」、2008年度史学研究会例会(京都大学)、2008年4月19日。
- 「ドイツ自由主義と住宅問題」、小シンポジウム「市民社会と社会問題――18-19世紀ヨーロッパにおける政治、経済、社会」、日本西洋史学会第57回大会(新潟大学)、2007年6月17日。
- 「ドイツ統一(1871年)前後の住宅改革構想」西洋史読書会大会第74回大会(京都大学)、2006年11月3日。
- 「19世紀半ばから第１次大戦までのベルリンにおける住宅改革運動」「パネル・ディスカッション 西欧における住宅改革の比較史的考察――19世紀半ばから20世紀半ばまで」の報告2、社会経済史学会第73回全国大会(大阪市立大学)、2004年5月30日。
- 「Bildungsbürgertumと資格社会」ドイツ現代史学会第22回大会(新潟大学)、1999年7月29日。
- 「19世紀中葉ドイツの住宅改革運動」日本西洋史学会第41回大会(名古屋大学)、1991年5月19日。
- 「ドイツ三月革命前後の労働諸階級福祉中央協会」西洋史読書会第57回大会(京都大学)、1989年11月3日。

学会発表（国際）

‘The importance of Alpine Architecture for Taut’s activity in Japan and Turkey’, International Workshop : (Re)building the Alps? 100 years from the publication of “Die alpine Architektur” by Bruno Taut, organized by Istituto di storia e teoria dell’arte e dell’architettura – ISA and by the Laboratorio di Storia delle Alpi – LabiSAlp, Mendrisio, 7 and 8 November 2019.

- 「嫌われた住宅地の社会史――ブルーノ・タウト設計『森のジードルング』」大阪市立大学平成27年度国際学術シンポジウム「文化接触のコンテクストとコンフリクト――EU諸地域における環境・生活圏・都市」セッションII「都市におけるセグリゲーション」(大阪市立大学)、2015年12月5日。
- ‘Forest Settlement of Bruno Tauto in the Past and Present’, Europe in Times of Glocalisaton/ Europa in Zeiten der Glokalisierung. Osaka City University/ Bielefeld University International Joint Seminar, Bielefeld Universität, 28. Oktober, 2014.
- ‘Stadtteilentwicklungsgeschichte von Kujo und ihre Umgebung’, Internationales Symposium: “Stadtteil mit Gemütlichkeit” zu gestalten. Area Management in Osaka und Hamburg, Hafen City University, Hamburg, 1. November 2011.
- ‘Bürgertum und Urbanisierung in internationalen Vergleich’. Zur Rezeption der deutschen Geschichte in den Ländern Ostasiens, Daegu Universität, Daegu, Südkorea. 1.(Freitag) und 2.(Samstag) Dezember 2006.

翻訳

- ティルマン・ハーランダー「20世紀後半ドイツ連邦共和国(西ドイツ)における住宅と都市の発展」(長尾唯、前田充洋と共訳)、中野隆生編『20世紀の都市と住宅――ヨーロッパと日本』山川出版社、2015年5月15日、247-278頁。
- アンドレーア・シュタインガルト『ベルリン 記憶の＜場所＞を辿る旅』(谷口健治・北村昌史・南直人・進藤修一・為政雅代訳)昭和堂、2006年4月20日（ナチスのベルリン：概観・9章・10章・11章・12章(41-62頁)／再統一されたベルリン：概観・39章・40章・41章・42章・43章(187-213頁)担当。)
- 「ハインリヒ・グルンホルツァー『フォークトラントにおける若きスイス人の経験』(1843年) ――19世紀中葉ベルリンの労働者住宅探訪記・翻訳」『新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)』(新潟大学教育人間科学部)2巻2号、2000年2月29日、165頁-181頁。

書評

- 「芦部彰著『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策――1950年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』」『史学雑誌』（史学会）126-12、2017年12月、1944-1952頁。
- 「馬場哲著『ドイツ都市計画の社会経済史』」『経営史学』（経営史学会）52-3、2017年12月、43-46頁。
- 「永山のどか著『ドイツ住宅問題の社会経済史的研究――福祉国家と非営利住宅建設』」『歴史と経済』(政治経済学・経済史学会) 第222号、2014年1月30日、44-46頁。
- 「松本彰著『記念碑に刻まれたドイツ――戦争・革命・統一』」『史林』(史学研究会)96巻5号、2013年9月30日、114-120頁。
- 「若尾祐司・井上茂子編『ドイツ文化史入門――16世紀から現代まで』『史林』(史学研究会) 95巻5号、2012年9月30日、88-94頁。
- 「山名淳著『夢幻のドイツ田園都市――教育共同体ヘレラウの挑戦』『西洋史学』(日本西洋史学会) 230号、2008年9月28日、84-86頁。
- 「大場茂明著『近代ドイツの市街地形成――公的介入の生成と展開』」『社会経済史学』(社会経済史学会) 70巻2号、2004年7月20日、113-115頁。
- 「望田幸男編『近代ドイツ＝資格社会の展開』」『西洋史学』(日本西洋史学会) 212号、2004年3月31日、88-92頁。
- 「中野隆生著『プラーグ街の住民たち――フランス近代の住宅・民衆・国家』」『西洋史学』(日本西洋史学会) 199号、2000年12月22日、75-79頁。
- 「後藤俊明著『ドイツ住宅問題の政治社会史――ヴァイマル社会国家と中間層』」『社会経済史学』(社会経済史学会) 66巻2号、2000年7月20日、112-113頁。
- 「常松洋・南直人編『日常と犯罪――西洋近代における非合法行為』」『史林』(史学研究会)82巻1号、1999年1月1日、151-157頁。
- 「末川清著『近代ドイツの形成――「特有の道」の起点』」『史林』(史学研究会) 80巻3号、1997年5月1日、116-123頁。
- 「川越修著『ベルリン 王都の近代――初期工業化・1848年革命』」『史林』(史学研究会) 72巻6号、1989年11月1日、147-153頁。

紹介

「チャールズ・Ｅ・マクレランド著(望田幸男監訳)『近代ドイツの専門職――官吏・弁護士・医師・聖職者・教師・技術者』」『西洋史学』(日本西洋史学会)173号、1994年6月29日、68頁。

- 「ウーテ・フレーフェルト著(若尾祐司・原田一美・姫岡とし子・山本秀行・坪郷寶訳)『ドイツ女性の社会史――200年の歩み』」『西洋史学』(日本西洋史学会)159号、1990年1月30日、67頁。
- 「川越修・姫岡とし子・原田一美・若原憲和編著『近代を生きる女たち――19世紀ドイツ社会史を読む』」『史林』(史学研究会)73巻6号、1990年11月1日、149-151頁。

その他刊行物

- ‘Trends in Research on Bruno Taut: Bruno Taut as a transcultural architect and theorist’ in: *UrbanScope*, vol. 11, pp. 1-18, July 2020. (論文「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」の英語版）
- 「ボーッと生きましょう」『アン ロゾ（総合教育科目ブック）』（大阪市立大学大学教育センター）21号、2020年3月、I-III頁。
- 「平成の終わりから」谷川稔・川島昭夫・南直人・金澤周作編『越境する歴史家たちへ』ミネルヴァ書房、2019年6月30日、139-142頁。
- Introduction (to the Special Topic: ‘Collective Inhabited Areas in Environmental history / Environmental writings’), in: *UrbanScope,* 9, June 2018, pp. 19-20.
- 「『史料』に住む―ブルーノ・タウト設計の『森のジードルング』」『団地再生まちづくり4――進むサステナブルな団地・まちづくり』水曜社、2015年9月28日、97-101頁(同タイトルの『ウェンディ』2014年3月文章の再録)。
- 「緑の中のベルリン――ティーア・ガルテンと森のジードルング――」『紫明』(紫明の会)第36號、2015年3月25日、12-16頁。
- 「解題 (ティルマン・ハーランダー(前田充洋訳)「社会的混合か分断か――都市と住宅経済のための挑戦」)」『都市文化研究』（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター）17号、2015年3月4日、137頁。
- 「『史料』に住む――ブルーノ・タウト設計の『森のジードルング』」『ウェンディ』（合人社グループ出版局）298、2014年3月15日、7頁。
- 北村昌史・米岡大輔「将来の大学教師としてのスキル向上を目指して――大阪市立大学文学研究科の「大学教育実習制度」(2011年度導入)における挑戦」『大学

教育（大阪市立大学）』（大阪市立大学大学教育研究センター）第10巻第1号、2012年9月30日、23-30頁。

- 「受賞のことば」『都市問題』（東京市政調査会）99巻10号、2008年10月、102-103頁。
- 「『ホープレヒト』案(1862年)とベルリン都市社会」『平成14年～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 研究課題 西欧福祉社会の源流 研究代表者 大森弘喜（成城大学経済学部教授）』2005年３月、69-76頁。
- 「1999年の歴史学会の回顧と展望 近代ドイツ」『史学雑誌』(史学会)109巻5号、2000年5月15日、371-374頁。

受賞

- 東京市政調査会藤田賞(2008年)

学会活動

- 史学研究会（評議員）
- 日本西洋史学会（編集委員）
- 社会経済史学会

Proudly powered by WordPress

大阪市立大学＊西洋史研究室

□□□□□□□□□□ □□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□

草生 久嗣 教授

(くさぶ ひさつぐ)

ビザンツ帝国史

kusabu@osaka-cu.ac.jp

研究テーマ

- ビザンツ学、異端学・宗派学、西洋中世における宗教問題、異端呼ばわりの社会

史

授業テーマ

- 世界の歴史、ヨーロッパの歴史、ビザンツ帝国の歴史、地中海世界の歴史、宗教心性の歴史、合同生活圏の歴史、西洋文献学

学生へのメッセージ

『外語』を大事にしてください。『外語』とは，使える外国語に限りません。自分が知らなかった分野の言葉の世界に興味をもち，踏み込んでください。大学はそれを全力でサポートできる数すくない機関。『外語』習得こそ，もっとも有効な大学の利用法です。 わたしは，創造的可能性・可塑性に満ちたメディアやプロジェクトが大好きです。文学，ライトな小説，コミック，アニメーション，映画，舞台公演，各種パソコンソフトウェア…良い作品・素敵な成果にできる限り接していたいのにスケールが膨大で大変です。でも経験上，学生のみなさんが，関心をもって「面白い」と思ってきたものは，だいたい私にも「当たり」なのでぜひ教えてください。話しにきてください。創造的関心に支えられたものに，くだらないものなんてありません。

主要業績

著書、論文、その他刊行物

- “Seminaries, Cults, and Militia in Byzantine Heresiologies: A Genealogy of the Labeling of “Paulicians.” *Radical Traditionalism, The Influence of Walter Kaegi in Late Antique,*

Byzantine, and Medieval Studies, edited by David Olster and Christian Raffenperger, Lexinton Books, 2019, pp.13-29.

- 「イスタンブルのテクフル・サライ」『地中海学月報』、407号、2018年、6頁.
- 「党派活動(ハイレシス)としてのビザンツ異端論――パウリキアノイを見る眼」『西洋中世研究』10巻、2018年、10-24頁.
- 「ビザンツの「神秘主義」と「異端」――コンスタンティノス・クリュソマルロスの事例（1140）を題材に――」『エクフラシス』２号，2012年３月，17-27頁.
- 「ロシア－ビザンツ緩衝地帯の蛮族観について――12世紀ビザンツ史書におけるペチェネーグを題材に――」『共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築」（北海道大学スラブ研究センター）報告書』2010年3月，241-263頁.
- 「越境する知をささえるもの ビザンツの情報集積」，『中央評論』266号，2009年，56-61頁
- 「ビザンツの「民衆的宗教運動」とその「霊性」について――異端メッサリアノイの射程――」『クリオ』22号別冊，2008年5月，63-72頁.
- 「ビザンツ帝国における宗教的《境界》の生成–正教会異端論駁書を題材に」，『歴史学研究』833号（2007年），180-188頁
- 「ビザンツ帝国の異端問題 —異端学と対策法規の分析から—」，『地中海学研究』25号（2002年），27-48頁
- 「12世紀ビザンツ帝国のボゴミール派問題－逸脱修道者弾圧の一例として－」，『史学雑誌』109編７号（2001年），39-60頁
- 「世界総主教座と皇帝のビザンツ帝国」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会：基礎データと研究案内（増補版）』166-170頁
- [書評]「根津由喜夫『ビザンツ貴族と皇帝政権—コムネノス朝支配体制の成立過程』」『西洋史学』245，45-47頁
- 「井上浩一報告へのコメント」『歴史科学』210，16-21頁
- 「回顧と展望：ロシア・ビザンツ」『史学雑誌』121 (5)，330-332頁

口頭発表

- ‘Internationalization of University Teaching: Osaka Panel,’ Global Trends in Higher Education, East Asia Panel, Mar. 6, 2019, University of Illinois Urbana-Champaign.
- ‘Intercultural Approach to the De Ceremoniis: A Preliminary project report,’ The Forty-

Fourth Byzantine Study Conference, Oct. 6, 2018, University of Texas.

- ‘Byzantine Petchenegs and Paulicians in the Twelfth Century,’ OCU Exchange Symposium,(University of Illinois, March 7, 2013)
- ‘Constantinople, A Multiethnic City in the Twelfth Century, International Joint Seminar on the Transformation of City – A Global Micro History,’ Feb. 23, 2013, OCU (Sugimoto)
- ‘Approaches of New Heresiology and Beyond – the Bogomils,’ The Twenty-First International Congress of Byzantine Studies (University of Sofia, August 24, 2011)
- ‘Medieval Heresy: The Case of Byzantium,’ Symposium: Medieval Studies in Japan, from Byzantium to Catalonia (University of Illinois, March 9, 2012)
- 「12世紀コンスタンティノープル宮廷知識人の異端学出版――エウティミオス・ジガベノスと『ドグマティケー・パノプリア』――」関西中世史研究会・関西ビザンツ史研究会（京都大学：平成24年12月15日）
- 「ビザンツ生活誌のために――ボゴミール派問題への異端学的アプローチを手がかりに――」日本ビザンツ学会大会2011年（立命館大学：平成23年9月10日）
- 「12世紀ビザンツにおけるローマ人（キリスト教徒）社会について――宗教問題研究の焦点と展望――」歴史学研究会西洋古代史部会（東京大学：平成23年8月2日）

研究助成

- 平成24年度～28年度科学研究費基盤研究C「古代・中世地中海世界における宗教空間と社会変動――トロス遺跡聖堂遺構の発掘調査」（研究分担者）
- 平成24年9月～27年8月科学研究費頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「EU域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」（担当研究者）
- 平成25年度～27年度科学研究費基盤研究B「盛期中世教皇庁の統治戦略とヨーロッパ像の転換」（研究分担者）

国際活動

- AIEB Meeting in The Twenty-Second International Congress of Byzantine Studies, Samokov, Bulgaria, Aug. 23, 2011 （日本ビザンツ学会会長代行として国際ビザンツ学会委員会議に参加）

- “Making an Anthology （Florilegium） in the Byzantine Empire （330-1453）” 平成21年度日本-欧州先端科学セミナー（JSPS/ESF）（九州大学 2010年3月）
- KUSABU, Hisatsugu, Comments on the Paper of M. Bibikov, Programme scientifique de la réunion du Bureau du CISH à Tokyo (University of Tokyo), Sept. 11, 2009.

講演活動

- 出張授業（兵庫県立三田高校）
- 出張講演（知求アカデミー【地中海学会企画】）

学会活動

- 合同生活圏研究会
- 日本西洋中世学会
- 日本ビザンツ学会
- 関西ビザンツ史研究会
- 史学会
- 日本西洋史学会
- 地中海学会
- 国際ビザンツ学会 International Association of Byzantine Studies (AIEB)
- 米国ビザンツ学会 Byzantine Studies Association of North America (BSANA)
- 国際中世学会（米国） International Congress on Medieval Studies (ICMS)
- 国際中世学会（英国） International Medieval Congress (IMC)

Proudly powered by WordPress

大阪市立大学＊西洋史研究室

□□□□□□□□□□ □□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□

向井 伸哉 講師

(むかい しんや)

フランス中世史
歴史学博士（トゥルーズ第二大学）

shinyamk@osaka-cu.ac.jp

研究テーマ

- 13-14世紀フランス、村落史、国制史

研究テーマについて

中世の民主主義：統治権が中央政府に集中している近代国家と異なり、中世世界では都市や村落などの基礎自治体が広範な統治権を有し、住民による政治・行政への活発な参加が確認される。

- 中世の多層的統治構造：統治権が中央政府に集中している近代国家と異なり、中世世界では村、領主、都市、地域、地方、王権といった統治権を行使するさまざまな単位が並存・重層し、一つのシステムを形作っている。

略歴

- 2001年3月 徳島県立城北高等学校 卒業
- 2005年3月 東京大学 文学部 歴史文化学科 西洋史学専修課程 修了
- 2007年3月 東京大学大学院 人文社会系研究科 欧米系文化研究専攻 西洋史学専門分野 修士課程 修了
- 2012年9月 トゥルーズ第二大学 歴史・美術史・考古学専攻 中世研究専門分野 修士課程 修了
- 2013年3月 東京大学大学院 人文社会系研究科 欧米系文化研究専攻 西洋史学専門分野 博士課程 単位取得満期退学
- 2017年11月 トゥルーズ第二大学 「時間-空間-社会-文化」博士課程 修了
- 2019年4月 大阪市立大学文学研究科講師
- 現在に至る。

主要業績

学位論文

- 「ルイ9世期のenquête—低ラングドック地方を中心にして」、卒業論文、東京大学文学部、2005 年。
- 「ルイ9世期の地方統治—低ラングドック地方ベジエのヴィギエ管区を中心に」、修士論文、東京大学大学院人文社会系研究科、2007年。
- *Communautés villageoises du Biterrois face à la guerre à la fin du Moyen Age : Le bilan des sources et l'exemple de Sérignan*, mémoire de Master2, Université de Toulouse II,

2012.

- *Sérignan et Vendres, deux villages biterrois face à la guerre dans la seconde moitié du XIVe siècle : Etude du gouvernement villageois au bas Moyen Age*, 3 vol., thèse de doctorat, Université de Toulouse II, 2017. （博論公開審査会報告記 : Compte rendu de la soutenance de thèse dans *Annales du Midi*, CXXIX, n. 300, 2017）

論文

- 「ルイ9世期低ラングドック地方におけるenquête」、『クリオ』、20号、2006年。
- “The beginning of the royal government in Biterrois: an interpretation based on the records of the 1247 enquête”, 佐藤彰一編『ピエール・トゥベール教授招聘事業報告書』、名古屋大学大学院文学研究科、2007年。
- 「ルイ9世期南仏ビテロワ地方における国王統治」、『西洋中世研究』、2号、2010年。
- “Histoire d’une communauté villageoise au miroir des portes et des murailles : le village de Capestang sous l’Ancien Régime”, in *Histoire de territoires dans le Languedoc médiéval et moderne (Actes du colloque international, 11 et 12 octobre 2014, Maison franco-japonaise, Tokyo)*, Tokyo, 2014.
- “Une communauté villageoise face à l’insécurité : la défense de Sérignan (Hérault) dans la deuxième moitié du XIVe siècle”, *Annales du Midi*, CXXVIII, n. 294, 2016.
- “La crise politique de la seigneurie à la fin du Moyen Age : l’exemple de Sérignan (Hérault) au XIVe siècle”, *Etudes Héraultaises*, L, 2018.
- 「中世後期南フランスにおける都市と農村の政治的関係—ベジエの都市エリートとヴァンドレスの村落共同体（一三五〇－一四〇〇）—」、『史学雑誌』、127-10、2018年。＊訂正（二頁十六行目）：「対外関係については」→「対外関係についてしか」
- “Les relations politiques entre ville et campagne dans la seconde moitié du XIVe siècle : les élites urbaines de Béziers et la communauté villageoise de Sérignan (Hérault)”, *Revue historique*, n. 688, 2018. *Erratum (p. 778, note 24) : “figure 1” → “tableau 1”
- “Les relations coopératives entre communautés d’habitants dans la viguerie de Béziers pendant la seconde moitié du XIVe siècle: assemblée, mission, taxation, association”, *Bibliothèque de l’Ecole des chartes*, CLXXIV, 2018-2019 (publié en 2020).

大阪市立大学＊西洋史研究室

□□□□□□□□□□ □□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□

大学院生/ PD・OD

PD・OD、都市文化研究センター研究員

- **貝原 哲生** ビザンツ帝国期のエジプトにおける宗派対立
- **佐伯(片倉) 綾那** 12世紀コンスタンティノープルの政治と社会
- **前田 充洋** 19-20世紀転換期ドイツの海軍と企業の活動
- **長尾 唯** 近代ドイツ

後期博士課程・前期博士課程

後期博士課程

- **立花 健** ドイツにおけるナチス抵抗運動史
- **上拾石 剛** ドイツの歴史教科書の中でホロコーストに関する記述の変遷
- **村上 遥香** 東ドイツにおけるヴェトナム人契約労働者について

前期博士課程

- **河邊 凌** ドイツ帝国における少数民族問題
- **大地 和将** 10世紀後半ビザンツ帝国の戦争と史書
- **小森 紗季** 14世紀初頭南仏における異端と民衆の関係について

巣立った方々の研究テーマ

- 米国プリマスで行われる先住民の「喪の日」について
- 西欧中世説教、イタリア中世史
- 東ドイツにおける教会と国家保安省
- 中世イタリアのコムーネと司法
- ハプスブルク帝国統治期ボスニア・ヘルツェゴヴィナのイスラーム教徒
- 西アフリカ・ガーナ地域社会と首長制から見た脱植民地化
- 中世スペインの教会と社会
- 1980年代ドイツにおける「記憶の場」建設運動の展開
- ピョートル1世治世期の出版物『ヴェードモスチ』と編集・出版組織
- ビザンツ外交使節研究
- 南イタリア中世史
- ドイツ帝国における中央党議員
- ルーマニア美術史、東方キリスト教における死後の世界観

Proudly powered by WordPress